

氏 名	しま だ よう こ 嶋 田 容 子
-----	----------------------

(論文内容の要旨)

発声者と聞き手の関係において、音に対する低次の知覚の個人差が聞き手にあれば、その個人差は、音声を聞くという高次の主観的経験を左右し、ひいては、発声者と聞き手の関係形成に深く関わる可能性がある。特に、言葉を持たない乳児とその養育者の関係においては、声を聞くということが様々な意義をもつ。両者の関係は非常に緊密なものとして形成されるにも関わらず、乳児の音声は養育者の聴覚にとっては馴染みのない音であり、両者の声と耳との間には「ずれ」がある。そのずれは、様々なレベルで調整されていると考えられる。

本論文では、乳児音声と養育者の聴覚の「ずれ」とその調整について検討した。具体的には、音声の解釈、音声に対して感じる主観的な親しさの程度、そして逆再生音声の検知力という側面から、乳児音声に対する成人の聴覚的感受性の変容を検討した。また、乳児音声が成人にとって親しみにくいものであるという、音韻発達研究の知見をもとにした本論文の前提について、発声行動の側面からも検討した。

乳児音声に対する成人の聴覚的感受性については、あまり多くの研究はなされていない。乳児の聴覚に関しては、母親の声への選好、周辺言語音への選好と弁別力の収斂等、乳児の聴覚的選好や弁別力が成人との関わりを通じて調整されることを、多くの研究が示してきた。また、成人の発声に関しては、マザリーズという言葉で知られるように、成人が乳幼児に対して、発話の抑揚や音の高さ等を変化させる傾向にあることが報告されている。話しかけの内容も成人による調整が認められている。しかし、養育者が乳児に対しておこなう調節のひとつとして聴覚的な要因を抽出した研究は非常に少ない(第1章)。

多くの先行研究は、乳児の泣き声に示される乳児のストレスや緊急性の度合い、あるいは空腹・不快などの基本的な要求のカテゴリーについてであれば、経験のある養育者がよく識別できたことを示している。しかし、乳児の声を聞いた養育者が、基本的な欲求の以上に意味づけを養育者がおこなっている可能性については検討さ

れていない。そこでまず、養育者がどのように乳児音声に対する分類や意味づけをおこなっているかを調査した（第2章）。この調査では、乳児の養育者に、日常の乳児音声を擬音語表記で分類するよう求めた。その結果、基本的な欲求の分類は参加者の間で共通性がみられたが、より複雑な感情を解釈したときは、擬音語の表記が多様で、養育者間の共通性も小さいことがわかった。

次に、乳児や養育に対する構えから来るトップダウン効果を排除して、乳児音声のもつ音そのものを親しく感じる度合いについて、実験的に検証した（第3章）。先行研究は、乳児音声に対する養育者の印象が日を追って変化する可能性を示し、また、養育経験が乳児の状態を聞き分ける力にもっとも大きな効果をもつことを示している。しかし、先行研究は乳児音声への聴覚的な反応に特に焦点を当ててではなく、乳児の身体の状態・表情など多くの情報からの判断に参加者に求めている。日常の養育環境では、多くの情報が用いられると考えられるが、本研究ではそれらの情報のなかで聴覚という要因が大きな効果を及ぼしている可能性を検討したい。そのため、乳児音声から前後の文脈を排除し、音声そのものに対する聴覚的な感受性が養育経験を通じて変容している可能性を検証した。実験には、養育経験者と非経験者が参加し、乳児の自発的な発声を1秒程度に切り取った音声のみを聴いて、それぞれの音声への印象を五段階尺度で評定した。実験の結果、養育経験者は、経験の無い人に比べ、乳児音声への親しさの評定値が高くなっていた。特に母音に似た乳児音声への親しさが、言語に似ていない乳児音声への親しさよりも高かった。音韻経験の異なる群に対する実験の結果からは、音韻経験を反映した親和性の程度とその変容がみられ、親和性の高さが、音への経験と強く関連することが示唆された。また、刺激音声の検証実験から、聴いた音が乳児音声であることは参加者には認識されていなかったことが示唆され、これらの実験の結果から、養育者において、音に対する聴覚的感受性の変容があったと解釈できた。ただし、これらの結果は、主観的な印象を問うものであり、これによって養育者に低次な知覚の変容が認められたとはいえない。そこで、乳児音声に独特な音のエンベロープへの敏感性が、養育経験を通じて変容する可能性を検討する実験をおこなった。実験刺激として、5ヶ

月の乳児の音声を順再生したものと逆再生したもの、同じ乳児音声を文字に起こした上で成人が読み上げ、それを順再生したものと逆再生したものと作成した。参加者は、これらの音声刺激に対して、聴いた音が順再生か逆再生かを判断した。養育経験者と非経験者が参加し、この実験の結果から、乳児音声の逆再生に対する検知力は、養育経験の影響を受けたことが示唆された。第3章で報告されるこれらの実験から、乳児音声に対する成人の聴覚的感受性は、養育経験によって変容していることが確かめられた。

本論の後半では、第3章までの議論で前提としている、成人にとっての乳児音声の異質性について再考した。まず、乳児音声発達に関する先行研究を概観した。乳児の音声発達段階を定義した複数の研究が、発声の「遊び」期あるいは「拡張」期という段階について記述しており、生後5ヶ月前後に、乳児が遊び的に発声をおこなうなかで様々な新しい音を産出する時期があることを示唆している。しかし、これらの記述は直感的なものであり、乳児の発声行動が遊び的なものであるという点についても、音声の質が多様化した減少するプロセスについても、実証的なデータはほとんど無い。知覚研究では、乳児の音韻弁別が発達過程で周辺言語の音韻カテゴリーに収斂するプロセスが詳細に報告されている。しかし、音声産出に関してこれまでに報告されているのは、乳児音声の音高が発達に従って成人音声のものに近づくことなど、主として音高のみに関するデータである。

発声される音声に関する研究だけではなく、行動としての発声を考察した記述の中にも、乳児の発声行動に遊び的な側面があるということは、逸話的に記されている。音楽発達心理学の文献でも、音声を探るように遊び的に発声を続ける乳児の行動が報告されている。しかし、これらの記述を裏付けるような実証研究は、ほとんどなされていない（第4章）。

そこで本稿では、乳児音声の異質性について、発声行動という観点から実験的な検討をおこなった（第5章）。実験では、乳児の自宅で乳児が応答を得られない状況で、快い状態を保って発声した場面を記録し、そのときの発声を養育者の応答がある場面での発声と比較した。さらに、別の実験条件として、乳児が応答を得られ

ない状況で発声をしたとき，その音声をリアルタイムでスピーカーから増幅した。その結果，応答を得られない場合にも発声は継続し，音声の増幅によってより高い比率で発声をおこなったことが明らかになった。乳児の発声行動が必ずしも応答的なものではなく，乳児の遊び的な行動として独自に発せられる場合がある可能性が示された。本論はこれらの議論により，乳児の声と成人の耳との隔たりを明らかにし，そしてその隔たりが，成人の聴覚的感受性の変容というかたちで調整されていることを示した（第6章）。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、乳児と養育者の音声的関わりから、養育者の聴覚的な感受性が養育経験により、乳児の音声に対して親和的に変容すること、また、従来の発達研究では、養育される側である乳児の個体変容のプロセスやメカニズムのみを扱ったものが多く見られるが、乳児と養育者のインタラクションにより、養育者自体も変化することを示した、新しい視点からの意欲的な試みである。

論文は、6章から構成されている。まず、第1章では、本論文で扱う問題提起がなされた。すなわち、母国語に収斂する前の乳児音声は、成人にとって異質なものであり、それが養育者の無自覚的な調節によって、意味を付与し、親和性を高めるよう変容するのではないかと指摘する。このような指摘は、論者の独自の提案であり、その視点の斬新さは高い評価に値する。

第2章と第3章では、乳児音声に対する成人の聴覚特性およびその変容が、独自の方法による聞き取り調査およびアンケート調査と巧妙な実験によって得られた事実から論じられた。

第2章では、調査研究によって、乳児を持つ養育者に、日常の乳児音声を擬音語で分類させその意味の解釈を求めた。その結果、基本的な欲求の分類は養育者で共通であったが、より複雑な感情を解釈した時には、擬音語に多様性が見られ養育者間の共通性も小さいことがわかった。ここで、論者は、養育者が、乳児の示していると思われる欲求を聞き分けるだけではなく、そうした欲求を超えた解釈を示し、意味を付与することが重要だと主張する。こうした方法は論者の得意とするところであり、探索的な問題の洗い出しにはきわめて有効である。

続く第3章では、乳児の音声とは判断できないほど分断された刺激を用いた評定実験によって、養育経験の違いが、その音声に対する親和性の評定に大きな影響を及ぼすことが示された。養育経験がある場合には、分断された乳児音声に対しても親和性が高く、養育経験のない女性では、逆にそれらの音声に対しては忌避感が大

きいことが示された。さらに、より巧妙な方法で、乳児音声に対する養育経験者における聴覚的感受性の高さを示した。乳児音声と成人音声の一部を切り出し、その逆再生音と順再生音を養育経験のある成人女性と養育経験のない成人女性に提示し、逆再生音であるか順再生音であるかの弁別を行わせた。乳児の音声は、成人音声とは音韻的な構造が異なるため、逆再生と順再生との弁別が困難であるにも関わらず、養育経験のある女性は成績が良かった。論者の仮説が見事に示されたものであり、研究者としての眼識の鋭さがあらためてうかがわれる。

続く第4章と第5章では、先行研究の緻密な分析と巧妙な実験で、乳児音声の特徴について論じた。

第4章では、乳児音声の特徴に関する先行研究を概観し、成人にとっての乳児音声の異質性の高いものである可能性について再考した。4～5ヶ月の乳児は、音の種類を拡張し、その中には、母国語の音韻以外に多くの言語の音素を含むことが、乳児の音声の異質性を際立たせ、養育者の聴覚的感受性とのずれが生じると論じている。

第5章では、乳児の発声状況を分析し、必ずしも養育者との応答的な状況における発声だけではなく、ひとりのときにも快い状態で発声を続けることの意味を論じた。実験では、養育者との対面場面での発声と、ひとりでのいる場面での発声、ひとりでの発声ではあるがスピーカーで増幅する場面での発声を比較した。その結果、養育者の応答がある条件よりも応答なし条件で、また単なるひとり発声条件よりも、増幅条件で発声時間の比率が有意に高いことがわかった。このような乳児の個人内の発声を直接的に比較検討した研究はこれまでに類がなく、きわめて興味深い結果であり、高く評価できる。論者は、さらに論考を進めて、このようなひとり発声行動が「遊び」である可能性、そして歌うことの個体発生的起源である可能性を、先行研究と融合することで指摘した。論者の豊かな発想力を明示する秀逸な実験である。

第6章において、一連の実験で得られた諸事実と先行研究が総合的に考察され、最初は、乳児の音声の異質さゆえに、養育者の聴覚的感受性との隔たりがあるが、

それが次第に変容していき、相互に調整され親和性が増していくと結論した。そして、そうした調整の失敗が育児不安や育児ストレスにつながるのではないかという社会的提言の可能性についても言及しており、本研究がより大きな社会的枠組みで考究されるものであることを示唆した。

もちろん、問題点もないわけではない。まず、第1に実証的研究を標榜しながらも、実際には実験数が少なく、ややもの足りなさを感じる。そのため、得られたデータからの考察としては多少飛躍している印象を与える。第2に、養育者における聴覚の変容と乳児の音声発達の特徴の関係を論じる根拠が明瞭に示されているとはいえない。しかしながら、こうした点は、新しい観点からの意欲的な挑戦においては許容できるものであり、本論文で提示された新しい論点の意義を損なうほどのものではない。むしろ論者の発想の豊かさときわめて高い独自性の現われとも解釈でき、今後の展開を期待すべきであろう。

以上審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2009年3月2日、調査委員3名が本論文とそれに関連したことがらについて口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。